

精神保健福祉相談援助の基盤

問題 21 次のうち、グリーンウッド(Greenwood, E.)が掲げたソーシャルワーク専門職の属性として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 個人的な責任を伴う、理論を携えた活動であること
- 2 地域社会の承認があること
- 3 専門職を養成するための教育システム及びその訓練課程があること
- 4 利他的な動機があること
- 5 構成員の大多数が加入している専門職能団体があること

問題 22 次の記述のうち、精神保健福祉の理論や実践に影響を与えた人物の説明として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 ジョーンズ(Jones, M.)は、病院の全環境を治療手段として用いる治療共同体の概念を提唱した。
- 2 ミニューチン(Minuchin, S.)は、集団や人間の相互依存性によるグループダイナミクスに着目した。
- 3 ロジャーズ(Rogers, C.)は、様々な心理療法やカウンセリング理論の基本となっている面接技法を統合したマイクロカウンセリングを開発した。
- 4 レヴィン(Lewin, K.)は、システム理論に基づいた構造的家族療法を展開し、家族成員間の境界に着目した。
- 5 アイビー(Ivey, A.)は、非指示的アプローチである来談者中心療法(クライエント中心療法)を確立した。

問題 23 事例を読んで、この時点で、サービス管理責任者であるB精神保健福祉士がCさんに行うべき対応として、適切なものを1つ選びなさい。

〔事 例〕

就労移行支援事業所を利用しているCさん(47歳、男性)は、企業への就職を目標としている。支援を受けながら就職活動が続けているが、採用面接を受けてもなかなか決まらないでいる。最近では、イライラを募らせ物に当たったり、反対に塞ぎ込んだりする様子が見られていた。昨日、Cさんは感情を抑えることができず、若い職員に対して、「なぜ、他の人には良い職場を紹介するんだ」「どうせ俺は働けないと馬鹿にしているんだろう」「お前は素人か」と語気を強めた。そこでB精神保健福祉士は、今後のことについてCさんと話し合いをすることにした。

- 1 就職に結び付かない現状を受け止められるよう、つらさをくみとる。
- 2 若い職員であっても、十分な知識や技術を持っていることを説明する。
- 3 これからはCさんと同年代の職員が、常に担当することを提案する。
- 4 求職活動を一旦中断し、趣味の時間を増やすことを勧める。
- 5 感情を抑えることができなければ、利用中止になることを伝える。

問題 24 次の記述のうち、精神保健福祉士が行う自立支援として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 サービス担当者会議では、クライアントの混乱を避けるため、必要なサービスの利用に関する説明は最小限で行う。
- 2 福祉制度の活用を希望しているクライアントには、その理由について聞くとともに、申請の手続の説明を行う。
- 3 地域で生活をしているクライアントには、フォーマルネットワークよりインフォーマルネットワークを優先した支援を行う。
- 4 非自発的入院となったクライアントには、任意入院に切り替わってから退院支援を行う。
- 5 セルフヘルプグループの活動では、グループワークの技法を積極的に使用して、援助を行う。

問題 25 福祉行政・関連行政機関に勤務する職員の主たる業務に関する次の記述のうち、正しいものを2つ選びなさい。

- 1 児童福祉司は、子どもや保護者からの相談に応じ、家族関係の調整等を行う。
- 2 障害者職業カウンセラーは、障害者の職場で支援計画に基づく直接支援を行う。
- 3 知的障害者福祉司は、公共職業安定所(ハローワーク)に配置され、職業紹介を行うために必要な援助について明らかにする。
- 4 保護観察官は、医療観察制度の対象者の精神保健観察を行う。
- 5 精神保健福祉相談員は、精神保健及び精神障害者の福祉に関する相談に応じ、必要な指導を行う。

問題 26 次の記述のうち、「障害者総合支援法」に基づくサービスを提供する者が行う業務として、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 施設長(管理者)は、個別支援計画の策定や評価を行い、サービスの進捗状況を管理する。
- 2 生活相談員は、障害者からの相談対応、情報提供、連絡調整等の支援やサービス等利用計画の作成を行う。
- 3 相談支援専門員は、入所施設に必置とされ、入退所における面接や利用者の相談援助を行う。
- 4 サービス管理責任者は、社会福祉施設における専任の管理者であり、運営管理を行う。
- 5 居宅介護従業者は、地域で生活する障害者への訪問による介護を行う。

(注) 「障害者総合支援法」とは、「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律」のことである。

問題 27 精神障害者の権利擁護に関する次の記述のうち、適切なものを2つ選びなさい。

- 1 インフォームドコンセントとは、必要だと考えられる治療や検査の方法について、十分な説明をすることである。
- 2 リーガルアドボカシーとは、障害者自らが、法的な面から権利を主張する活動のことである。
- 3 援助の記録は、事実の経過や根拠を証明する資料として、権利擁護に貢献するものである。
- 4 ピアアドボカシーとは、地域の中で障害者が当たり前の生活を営めるように、市民参画型の活動を展開することである。
- 5 合理的配慮とは、障害者が他の者と平等に全ての人権や基本的自由を享有するための、必要かつ適当な変更や調整のことである。

問題 28 ジェネラリスト・ソーシャルワークの成り立ちに影響を与えたモデルやアプローチに関する次の記述のうち、最も時期が古いものとして、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 クライアントと地域社会が有する問題解決能力の強さを評価し、積極的に活用しようとするストレングスモデルが提唱された。
- 2 ソーシャルワークの共通基盤を確立した上で、そこから全体を特質づける枠組みを再構築するジェネラリストアプローチにより統合化が進んだ。
- 3 エコロジカル・ソーシャルワークが台頭し、人と環境の相互作用に焦点を当てた生活モデルが提唱された。
- 4 社会的に不利な状況に置かれた人の自己決定の能力や主張性を高め、主体的にその状況に働きかけ、改善するエンパワメントアプローチが台頭してきた。
- 5 「状況の中の人」に焦点を当てて、クライアントの問題状況を捉える心理社会的アプローチが提唱された。

問題 29 次の記述のうち、マルチディシプリナリ・モデルの説明として、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 専門職はあらかじめ決められた役割をこなす。
- 2 各職種の役割はおおむね固定的であるものの、一部流動することもある。
- 3 多職種間で役割固定がなく、横断的な支援を行う。
- 4 各職種の専門性を基に活発に意見交換する。
- 5 専門職間に階層性がなく、相互作用性は大きい。

(精神保健福祉相談援助の基盤・事例問題 1)

次の事例を読んで、問題 30 から問題 32 までについて答えなさい。

〔事 例〕

D 精神保健福祉士は、処方薬への依存のために U 精神科病院の薬物依存症外来に通う E さん(26 歳、女性)が減薬を目的に入院したことを契機に担当となった。主治医から話を聞いたり電子カルテの情報を確認したりした D 精神保健福祉士は、E さんが、幼少期の実母による過酷な虐待や、思春期における性的被害の経験を有していることを把握した。そこで、薬物問題に加え、過去の逆境体験に対する理解や、その体験が現在に及ぼす影響をも視野に入れた支援が必要であると考えた。(問題 30)

入院時の E さんは挑発的態度を繰り返しており、病棟スタッフとの信頼関係を築けずにいた。D 精神保健福祉士は、過去の体験に基づく強い人間不信や自己否定感が根底にあることを読み取り、温かく落ち着いた関わりを続けた。その結果、E さんは、主治医と D 精神保健福祉士には心を許すようになり、「死にたい」と苦しい胸の内を打ち明けるようになった。(問題 31)

E さんは、病棟内のプログラム参加には消極的で、ルール違反ばかり繰り返していた。スタッフに注意されると、暴言を吐いたり自殺をほのめかしたりするので、スタッフの間には E さんに対するネガティブな感情や不全感が蓄積され、いつしか病棟チーム全体が機能不全に陥りつつあった。そこで、D 精神保健福祉士はケアカンファレンスで E さんを取り上げることを提案した。その中で病状や治療方針を共有したり、スタッフが E さんとの関わりの中で受けた傷つきや恐れ of 気持ちを表出できるよう働きかけたりした。また、相互の役割を確認し、日々の苦労をスタッフ間でねぎらい合えるようにした。その結果、病棟チームにあった刺々しい雰囲気は薄れ、E さんの言動も徐々に落ち着きをみせるようになった。(問題 32)

D 精神保健福祉士は、E さんの退院後の安全な生活を重視するとともに、過去に植え付けられた無力感や自己否定感から解放されることを目標とした。そして、もう一度自分の人生に対するコントロール感を取り戻すために、ストレングスに着目した支援を大切にしたいと考えていた。

問題 30 次のうち、この時点でD精神保健福祉士が意識したEさんに対するアプローチとして、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 フェミニストアプローチ
- 2 課題中心アプローチ
- 3 ナラティブアプローチ
- 4 トラウマインフォームドアプローチ
- 5 解決志向アプローチ

問題 31 次の記述のうち、D精神保健福祉士がこの時点において行った対応として、適切なものを2つ選びなさい。

- 1 Eさんには内緒で、両親に希死念慮があることを話した。
- 2 つらくても死んだりしないという約束をEさんから取りつけた。
- 3 どんなときに死にたくなるかをEさんに尋ねた。
- 4 人の命がいかに尊いものかをEさんに説明した。
- 5 Eさんが正直に気持ちを話してくれたことへの感謝を伝えた。

問題 32 次のうち、D精神保健福祉士がケアカンファレンスを通して病棟チームに果たした機能として、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 管理的機能
- 2 メンテナンス機能
- 3 教育的機能
- 4 タスク機能
- 5 支持的機能

(精神保健福祉相談援助の基盤・事例問題 2)

スーパービジョンに向け、自分の関わりを振り返った精神保健福祉士(34歳、女性)の記録(事例)を読んで、問題 33 から問題 35 までについて答えなさい。

〔事 例〕

Fさん(32歳、女性)は、私が勤務する精神科病院に18歳から統合失調症で入院していた。私が担当になったのはFさんが22歳の春だった。入院中のFさんは年配者と過ごすことが多かったため、ロールモデルにできる人がおらず自分の将来像を描けないでいた。そのため、同世代である私は会うたびに話しかけ、Fさんの将来について語ってもらった。このことに刺激を受けたFさんは、次第に自分自身の存在を認め、退院を考えるようになった。(問題 33)

Fさんが退院したのは28歳の時だった。Fさんは受診時には必ず相談室に顔を見せ、これからの夢を語っていった。私はFさんとの関わりを通し、信頼関係の構築を実感できるようになった。この頃Fさんは、経済的自立をするために働きたいと話していた。私は夢の実現への第一歩として、障害者就業・生活支援センターを紹介し、同行訪問することにした。面接の際Fさんは、「仕事がしたい」と伝えることはできたが、具体的な業種などの説明ができなかった。

Fさんは希望する業種の説明ができず落ち込んでいたが、普段は説明できていることや、夢や希望を持ち頑張れていることを伝えた。そして、働きたいという意欲を持っていることはFさんの強みであり、それが自己実現につながることをFさんに説明した。(問題 34)

Fさんとの出会いから10年が過ぎ、私は病院から地域活動支援センターに異動し、Fさんと会う機会も減っていた。ある日のこと、Fさんから手紙が届いた。そこには、仕事も生活も順調であること。また、「結婚を前提に付き合っている人がいるが、もし子どもができたらどうすればいいか」と悩みが記されていた。その内容は、結婚や子どもができるかもしれないという将来への希望と、病気を抱えながら育てることへの不安、服薬による胎児への影響を心配しているものであると理解できた。(問題 35)

問題 33 次のうち、この時点で「私」がFさんとの関わりの際に支援目標として意識したこととして、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 セルフエスティームの向上
- 2 服薬を自己管理する能力の向上
- 3 ストレスに対処する技術の向上
- 4 社会生活技能の向上
- 5 権利を主張する能力の向上

問題 34 次のうち、この時期のFさんと「私」の関係について、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 アドボカシー
- 2 ヘルパー・セラピー原則
- 3 パターナリズム
- 4 パートナーシップ
- 5 コンフリクト

問題 35 次のうち、この時点のFさんの状況として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 ステイグマ
- 2 フラストレーション
- 3 スケープゴート
- 4 アパシー
- 5 アンビバレンス